

映画館今昔物語

24期 徳田完二

高校時代、最大の娯楽は映画で、中間や期末の試験が終わった日に行くことが多かった。試験を終えた解放感に浸りながら、自転車で大橋川を越えて映画館を目指す時の気持ちは格別だった。

あのころ北高では松江市内で上映している映画を三つに区分していた。「推薦映画」「禁止映画」と、それ以外の映画である。月ごとに映画のタイトルと上映期間を書いた一覧表が校内のどこかに張り出され、それぞれのタイトルのそばに「推薦」「禁止」などと示されていたような記憶がある（ただし禁止映画のタイトルは書かれていなかったが）。あれは確か生徒指導部の仕事だった。禁止映画はもちろん成人映画で、それ専用の映画館があった。一度も行かなかったけれど。

あの時代の映画館は、混んでいれば立見をしたし、ロードショーでなければ三本立ても時々あった。また、土曜日には夜通し上映するオールナイトも普通にあった。オールナイトと言えば、学生時代、旅の途中で宿を取らずに映画館で一夜を明かしたことが何度かある。その方がユースホステルや民宿に泊まるより安上がりだったからである。

大学二年の夏休みのこと、秋田県出身の同級生から、うち（郷里の自宅）に遊びに来ないかと誘われた。一緒に誘われた友人と二人、周遊券を買い、都から急行列車に延々と揺られながら秋田を目指した。周遊券は、自由席なら急行券なしで急行に乗れたし、指定区域内では乗り降り自由だったので、学生時代にはよく利用したものだった。

道半ばの新潟市で途中下車したのは土曜日の夕方だった。目についた食堂で夕食を食べてから少し時間をつぶし、オールナイトをやっている映画館を探した。見たのは成人映画三本立てで、観客は十数人くらいだったように思う。

三本の映画が一巡して初めて見たのがまた始まると、げっそりした気分になった。さすがに食傷気味だったのである。目をつぶって寝ようとしたが、映画の音（と言うよりも声）がうるさくて簡単には寝つけない。とは言いながら、いつしか眠りこんだ。

ふと気がつくと、暗い館内で何やら男の音がする。映画の上映はもう終わっていて、スクリーンは暗かった。男の声は、座席で眠っている観客を起こして回っているらしかった。その声はやがて私たちのところまで来た。声の主は警察官だった。「お前、家はどこだ？ こんなところにはいないで、ちゃんと家に帰れ」と、その地方のアクセントで諭すように言われた。彼は、夜遊びして家に帰らない“不良”を捕導しているのだった。“不良”の片割れとみなされた私たちは、仕方なく映画館を出て、早朝の、まだ眠っているような新潟の街に出た。妙にわびしいような気分になった。

同級生宅に着いたのはその日の夜になってからだった。そこでは両親とおばあさんが歓待してくれた。特に、だいぶお年だったおばあさんは、気を使ってであろう、しきりにあれこれ話しかけてくれた。が、その純粋なお国言葉は正真正銘ただの一言も聞き取れなかったのである。まるで字幕のない外国映画のようで、私たちはただ曖昧にうなづくしかなかった。

今や映画館はすっかり様変わりしている。座席は指定で、立ち見などない。映像はクリアで、雪が降る（フィルム白い傷がちらちらする）画面は昔懐かしいものになった。音響はド迫力で、おなかにずんずん響いてくるような効果音もある。レイトショーはあってもオールナイトなどない。今どきの映画館で、もし成人映画三本立てのオールナイトがあったとしても絶対に行かないだろうな…この文章を書きながらそんなつまらないことを考えた。

連載ミニエッセイ 22

京都の祭り

京都は祭りが多い。大小さまざま、年に三百くらいもあるらしい。その中で特に有名なのは、三大祭りと呼ばれる、葵祭（五月）、祇園祭（七月）、時代祭（十月）だろう。私は京都に長年住んでいるが、実を言うと、京都の祭りを見物したことがほとんどない。三大祭りも含めてのことである。私が実際に見た祭りは、祇園祭の宵山（山鉦巡行の前夜）と鞍馬の火祭り（牛若丸が育った鞍馬山にあるお寺の勇壮な祭り）くらいである。その代わり、葵祭と祇園祭には出演（？）したことがある。というのは、学生時代に祭りのアルバイトをしたのである。

葵祭では、平安装束を身にまとった人々が長い行列をなして歩くが、その中には学生アルバイトがたくさん混じっている。学生に振られる役は「下っ端」（下層階級）で、身分の高い貴族は祭りの関係者になる。わたしたちは黒い烏帽子と白い粗末な装束に草鞋という出で立ちで都大路や加茂川沿いの道を歩いた。祇園祭では、豪華絢爛な山や鉦を牽く要員の中で学生アルバイトが重要な「労働力」になっている。私は行列の先頭に行く長刀鉦を牽いた。

祭りのアルバイトの仕事はいたって単純で、決められた集合場所に行き、係の人の指示に従って衣装に着替え、大勢の人に交じってゆるゆると歩いたり山や鉦を牽いたりするだけである。これは仮装大会に参加するようなもので、初めは物珍しさもあって面白かった。大きな祭りだと、途中で休憩があり、昼には弁当が出た。

祭りが終わると、アルバイト学生は日当をもらい、ちょっと懐が温かくなった気分で帰って行った。「祭りのバイト」と呼ばれていたそうした仕事は、もちろん一日限りの単発的なものだが、けっこう実入りがよかった。昭和五十年代の相場で一回五千円だった。ちょっとした小遣い稼ぎとして悪くなかったのである。

その仕事にありつく方法は、学生部のアルバイト募集の張り紙を見て申し込む方法のほか、部活を通して応募する方法があった。一時期、同じ学部の友人何人かで、「京都伝統文化研究会」とか何とか適当な名前をつけたグループを作り、学生部で祭りのバイトの掲示が目にとまると連絡を取り合って、都合がつけば行く、ということをしていた。その経験を通して分かったのは、葵祭のような知名度が高い大きな祭りも、地元の人しか知らないような小さな神社の祭りも、賃金は同程度であること、そして小さな祭りの方が歩く距離がずっと短いため早く終わることだった。つまり、時間あたりで考えると、小さな祭りの方がだんぜん楽で、タイパ（タイムパフォーマンス）がよかったのである。もっとも、あのころタイパなどという言葉はなかったけれど。

京都に祭りが多いのは神社が多いためである。また、祭りの行列がしばしばアルバイト学生を当てにして行われているのは、京都には大学が多いからだろう。このように祭りと学生は持ちつ持たれつの関係にあると言える。

バイトとしてではなく祭りに出たことも一度ある。それは数年前のことで、町内会長の役が回ってきた時だった。私の町内の住民は近くにある神社の氏子ということになっていて、その神社の春の例大祭の時、町内会長も祭りの行列に加わるよう要請される（強制的ではないが）。その時は、御輿を担当する人だけが法被を着て、それ以外の人には普通の服装で行列に加わるというやり方だった。その際にはけっこうな距離と時間を歩いたのだが、アルバイト代が出なかったのは言うまでもない。